

福祉にフィットしない方たちの次の選択肢を考えるワーキング

1 目的

既存の福祉サービスに合わず行き場がなく安心できる居場所がない障害のある方を対象に、地域での支援の在り方や新たな地域資源について協議し、アイデアを創出する。

障害特性、当事者本人の意向、触法など様々な理由で就労継続B型など福祉的就労が合わず企業就労も難しいような、いわゆる狭間の障害当事者を対象に日中活動等の次の選択肢を検討する。

2 ワーキングにおいて取り組む主な内容について

様々な分野及びワーキングメンバーから意見を集め、福祉に合わない障害当事者の現状と課題を確認する。また、福祉サービスを含め、広く地域の社会資源利用について可能性を検討し、支援の体制を想定する。

3 ワーキンググループメンバー（敬称略）

座長	丸山 晃	（立教大学 コミュニティ福祉研究所）
	池田 怜生	（社会福祉法人 調布市社会福祉協議会 市民活動支援センター）
	押澤 厚志	（社会福祉法人 調布市社会福祉協議会 こころの健康支援センター）
	和泉 怜実	（社会福祉法人 調布市社会福祉協議会 調布市子ども・若者総合支援事業 ここあ）
	矢辺 良子	（調布狛江地区保護司会）
	仁田 典子	（NPO法人 調布心身障害児・者親の会）
	福田 信介	（社会福祉法人 調布市社会福祉事業団 障害者地域生活・就労支援センター ちょうふだぞう）

4 事務局

調布市社会福祉事業団 障害者地域生活・就労支援センター ちょうふだぞう

調布市障害福祉課

5 令和4年度のワーキングにおける成果目標

福祉サービスに合わないなど、望まない障害のある方の現状を把握し、課題確認及び整理を行い、支援の方向性を検討する。

～第2回ワーキング～

日時：令和4年10月25日（火） 13時30分から15時30分

場所：総合福祉センター 6階 参加者：委員 7名 事務局 7名 オブザーバー1名

小テーマ「地域資源の共有と意見交換」

内容：ワーキング前に各委員に提出してもらった地域資源調査シートを元に意見交換を行い、現在のニーズについて検討した。

主な意見

- ・居場所事業は日によって雰囲気や混雑具合も異なるため、「何をしてもよい」ということがハードルになることもある。
- ・学習支援・相談事業は家族からの相談が多い。障害のある中学生の家族の相談先は少ないよう。
- ・学習支援の要件外の人には問合せ時に伝えており、相談は少ない。ただ断るだけではなく相談事業の紹介はしている。相談で関わる際は発達センターの関わりもあるとよいと感じている。
- ・BBS会や更生保護女性会、協力雇用主など協力機関も多い。
- ・農福連携は再犯率が低いですが、満期で出所する人は孤独なことが多く、再犯率も高い。
- ・保護司との面談に来ない場合は周囲に知られないよう手紙を出すこともあるが音信不通となってしまうこともある。
- ・障害があると思われるが手帳を取得していない人も多い。
- ・障害のある犯罪を犯した人の支援機関は現状ない。
- ・刑務所内での就労支援はない。出所後から就労に向かう流れだが、社会訓練が必要だと感じる。
- ・親の会では障害受容の支援として家族同士の話し合いやペアレントメンターなどを行い、先を見通せるようにすることで共に話し合い共感しあっている。
- ・あくろすでは65歳以上のボランティアが多く、現役世代の参加が課題となっている。
- ・地域に多様な入り口を作りたいが、今ある資源にどのように働きかけるとよいかかわからない。
- ・ボランティアと施設側の関わり方が難しい。
- ・現在しごと財団でソーシャルファームの取り組みを始めている。今回のワーキングに参考となるのではないかな。

まとめ

条件の緩やかな働く先や、孤立を防ぐ居場所などが求められている。

次回以降、新たな雇用形態のソーシャルファーム含めゲストスピーカーを迎えて情報収集しながら今後のワーキングの方向性を検討していく。

～第3回ワーキング～

日時：令和4年12月16日（金） 14時00分から16時00分

場所：あくろす3階 あくろすホール 参加者：委員7名 事務局6名

小テーマ「ソーシャルファームの取組説明と意見交換」

内容：新たな雇用形態の「ソーシャルファーム」について、しごと財団の担当者をゲストスピーカーとして招き、話を聞いた。

主な意見

- ・選択肢のひとつとしてはとても良い。
- ・補助金が5年間となっているため、その後の展開が気になった。
- ・期待は高まったが、まだ間口はとても狭いと感じた。
- ・企業側のメリットを伝え、紹介できるようになりたい。
- ・ソーシャルファームとの繋がりがないと紹介も難しいと思った。
- ・障害者雇用に向けた中間施設になりにくいと感じた。トラブルについても聞いてみたい。
- ・福祉的な支援を受けるために精神科通院が必要な場合、通院を理由に断る人や良い求人があっても希望しない人もいる。そのような人が使えると良い。
- ・既存の施設に併設している所が多く、一施設としてフォローなしでやっていけるのか心配。
- ・フィットしない人の第1歩としてのハードルはまだ高く、ワーキングの趣旨としては難しいと感じた。
- ・突出した能力を持つフィットしない人にはソーシャルファームは適している。
- ・ソーシャルファームが増えていくことが大切。増えた上で調布のことを考えてもよいのではないかと。
- ・調布市で実現するのであれば、市内の企業に直接声をかけて協力を募るとよい。
- ・障害者雇用率に算定されない人がソーシャルファームでは対象になることで働く場の幅が広がる。
- ・補助金がある5年間に他のことを考えられ、一般の企業としては有益な補助。
- ・作業所と企業の間ができたことは大きい。
- ・港区では週2時間の超短時間雇用もある。遠隔操作の分身ロボットを利用し、自宅で寝たきり等の状態でも店舗で短時間就労できる。
- ・コミュニティカフェという誰が来ても良い場所もある。居場所の選択肢になるかもしれない

まとめ

新たな雇用形態「ソーシャルファーム」についてワーキングを通して理解を深めた。ソーシャルファームは、一般的な企業と同様に自律的な経済活動を行いながら、就労に様々な理由で困難を抱える方が、必要なサポートを受け、他の従業員と共に働いている社会的企業であることがわかった。そのため福祉にフィットしない方の就労体験の場になる可能性も見出せた。

これまでの到達点

第2回では第1回ワーキングで挙げた課題からキーワードを抽出し整理した。共通した課題として4つの観点「相談」・「居場所」・「体験」・「自己理解（学習）」が挙げられた。「体験」は就労やボランティア等のできる場所で、「自己理解（学習）」は自身の障害特性のことや生活上の困難について理解を深める場所の必要である。こうした観点から参加した委員の所属している機関から社会資源について報告してもらいネットワーク形成を図った。

第3回ワーキングでは、海外で実践されている「ソーシャルファーム」について理解を深めた。東京都が行っているソーシャルファームの制度や実際の形態についてしごと財団の担当者から学んだ。

今後の展望と課題

就労する場や「体験」という点では新たな雇用形態である「ソーシャルファーム」が福祉サービスと企業就労の中間的な場になる可能性が高い。一方でまだ始まったばかりの制度であり実際の課題について把握していく必要がある。

また「コミュニティカフェ」という地域で人と人を結ぶ居場所や地域社会の場についての情報提供があり、第4回ではコミュニティカフェについて理解を深める予定である。

次年度は「ソーシャルファーム」，「コミュニティカフェ」の実践について企業や事業所にヒアリング等を行いどのような形で福祉にフィットしない障害のある方への支援に導入していけるのかを検討していく。